

イスラエルという 国に学んだこと



写真は崩れた壁から漏れる光で壁画を見つめる筆者

北村 さおり (きたむら さおり)

前・在イスラエル日本国総領事館
国土交通省北海道局参事官室付開発専門官

プロフィール

1997年北海道開発局入局。2017.6～2020.3まで在イスラエル日本大使館に勤務。
現在は北海道局参事官室にて北海道総合開発計画の推進に係る業務を担当。

はじめに

皆さんはイスラエルというと何を思い浮かべるだろう。例えば、5月初旬に報道で取り上げられたパレスチナとの関係悪化によるガザとの交戦、新型コロナウイルス感染症ワクチンをいち早く国民に摂取した国、あるいはスタートアップの国ということだろうか。

私は赴任してイスラエルという国に関心を持つようになったが、それまでは未知の国であり、未経験の海外赴任への情熱だけで赴任を決断した。外務研修同期、友人に赴任する国を告げると、危険ではないのか、とか大変だね、と口をそろえたように言われた。物理的に遠い国ゆえの関心の低さと日本では紛争で報道されることが多いという理由等から日本からの渡航者は多くなく、それゆえイスラエルについてよく知る日本人は比較的少ない。

イスラエルには直行便はなく、赴任の際に搭乗した欧州乗継便では他の便より1時間ほど早く、遠方の待合室への集合を求められる。そして荷物検査を再度受け、ようやく機内に入る。機内では、見るからにアジア人の私に興味津々で、どこから来たのか、旅行か、などと気さくに話しかけてくる。とにかく始終にぎやかで、これがイスラエル国民なのかと驚き、過去の土地を追われ、大変な屈辱を受けて生きてきた歴史から想像するイメージが大きく変わった瞬間だった。

私はイスラエルへの赴任の約3年間で、主にインフラ企業誘致と観光を担当した。赴任の間、ガザからのミサイルが居住していたテルアビブ上空に飛来し、アイアンドームという迎撃システムにより花火のように上空で音がした経験はほんの数回だったと記憶している。



外務省HPより ■：パレスチナ自治区（ヨルダン川西岸及びガザ地区）

このような話をするとやはり危険な国、という印象を持たれてしまうかもしれないが、国内は監視システムにより犯罪も比較的少なく、また軍力に信頼を寄せている住民からは、ここは安全だと言われた。通常、通勤は自家用車だったが、徒歩で通勤し深夜まで仕事をして帰っても、パブは遅くまで開いているし、オープンカウンター、さらにベンチで話し込む人もいて、東京都内の繁華街のにぎやかさに似ていた。

大使館に着任し、仕事の関係者に挨拶する度に「イスラエルをどう思うか。イスラエルでの仕事の目標は何か。」という質問を浴びた。イスラエル国民の多くは未知への探求心、目的意識が高く、いつ何時何が起きても対応できるという自信に満ちているように見え、その理由は何だろうか、と考え始めた。私はこの段階でイスラエルに関心を持ち始めたが、本誌を読むみなさんにも興味を持っていただけたら幸いである。

イスラエルという地

イスラエルは地中海に面した長い海岸線を持ち、約2万kmが海に面し、面積は四国くらいだが南北に細長い国である。南は国土がほんの一部、紅海に面しており、最南端のリゾート地であるエイラットはヨルダンとエジプトの国境が徒歩圏内にある。

日本大使館は地中海沿岸のテルアビブにあり、欧州から多く観光客が来るリゾート地として人気である。三大宗教の聖地エルサレムを中心とした多くの史跡、エルサレムから車で約1時間でビーチでのリラクゼーション、パーティやナイトライフを楽しめるテルアビブに移動できる。世界遺産は9カ所もあり、イスラエルの観光ガイドの試験は紀元前からの長い歴史を説明できる能力が問われ、かなり難関だと聞いている。

このため、ガイドと一緒に観光するのとガイドなしでは雲泥の違いであり、ガイド付きの観光をお勧めす

る。イスラエル観光についてはイスラエル観光省のウェブサイト (<https://info.goisrael.com/en/>) または駐日イスラエル大使館のフェイスブックをぜひ訪問してほしい。

ユダヤということ

イスラエルでは、ユダヤ人はユダヤ人の母親から生まれた子孫を指す。いわゆる旧約聖書は、ユダヤ教では唯一の聖書であり、「旧約」とは言わない。ユダヤ人が約74%を占め、暦はユダヤ暦、金曜の日没から土曜の日の入りまでシャバットと呼ばれる安息日のため、イスラエルでの休日は金・土となる。このため、観光に行く際には日程に注意しないと休日である金・土及びユダヤ暦の祝日には閉めているお店が多い。また、イスラエルの祝日は年によって変動するので注意が必要である。私の生活範囲では病院（ロシア系出身の看護師が多いためと聞いた）、タクシー以外で英語の通じる場合がほとんどだった。

ユダヤ教と言えば黒い帽子に黒いスーツをイメージする人も多いと思うが、宗派によってさまざまである。男性は超正統派と呼ばれる最も戒律に厳しい宗派で黒服を着る人もいれば、普段は我々と変わらない服装で、宗教行事の際にキッパ（以下写真参照）と呼ばれる皿状の小さな帽子を身に着けるだけの人もいる。超正統派の女性は、肌を見せないよう夏でもタイツを履き、髪の毛を見せないようショールを巻く他、かつらを身に着ける人もいると聞いて驚いた。

下の写真は通称「嘆きの壁」というイスラエルでいう「西の壁」である。壁を正面に男女の礼拝区域が高い柵で仕切られており、私が赴任する前にリベラルのユダヤ教徒から男女共同で礼拝できる区域を設置する計画が持ち上がったと聞いていたが、超正統派に反対されて設置に至っていないと聞いている。



テルアビブビーチ



西の壁で祈るユダヤ教徒



キッパ

ここで述べておきたいが、日本ではイスラム教と混同しがちだが、ユダヤ教の生活習慣での大きな違いは飲酒を禁じていないし、一部例外を除き女性が肌を隠す必要がないことである。これは私自身がイスラエルでの生活で良かったとしみじみ感じたことである。

ユダヤ教の祝日は比較的多いが、特筆すべきは9月頃のユダヤ新年を迎えて10日後のヨム・キプールの日である。イスラエルの民の罪を許してもらうために神の前に祈ったことに由来し、この日は日没から翌日の日没まで断食する。ユダヤ教を信じていない人でも断食はするらしい。

交通機関、レストラン、テレビ放映等、全ての営業行為が禁止となり、車の運転も緊急車両以外禁止となるので、子ども達が普段は走れない車道を自転車でも走り回る姿を見かけた。

気候・水

中東は砂漠の多い乾燥した気候だが、テルアビブ等の海岸都市は、海に面しているため適度な湿度を感じられ夏も比較的過ごしやすい。時々短期間で雨が降るが、恵みの雨である。しかし、急激な大雨により国道の閉鎖や、砂漠で粘土質になった水を吸わない大地に流れた雨水が鉄砲水となり、急流に飲み込まれて人が亡くなるという悲しい出来事もあった。

70年以上前の建国の際、寄付を募って植樹を進めたことによるものだと聞いたが、緑が比較的豊かなことにも驚く。庭には花が咲き誇り、街路樹の幹は力強く緑に覆われ、夏の炎天下でも街路樹による木陰のおかげで散歩を楽しめる。庭や街路には時々地表に管が見えるが、イスラエルで発明された点滴灌漑という技術



ヨム・キプールの高速道路への落書

により樹木や花に水を与えて育てている。この点滴灌漑の技術は、イスラエル国内の野菜・果物栽培の自給率の高さを支えている。野菜、果物は生で食べられ美味しく、八百屋やマーケットに通うのが楽しみだった。また、水を海水から生み出す淡水化の技術に優れており、飲料水の約6割が淡水化によるものとされている。2050年に世界人口の約半数が水不足に直面するという国連の予測もあり、淡水化技術が注目されている。

観光においても大切な資源であり、人が浮かぶ濃度の濃い塩水とミネラルの宝庫として知られる死海は、年間1m超のペースで水面が低下しており、地下にあった天然の水路が枯渇したため、周辺には陥没している土地も見られた。死海はイスラエルとヨルダンの国境を南北に走るヨルダン溪谷の南部にあり、死海保護と水不足解消のため、EU諸国、米国、日本等の支援を受け、イスラエルとヨルダンが紅海から死海へ濃縮海水を運ぶ紅海・死海プロジェクトを進めようとしているが、両政府間の調整がなかなか進んでいない。

日本との関係

イスラエルでは親日家が多いが、イスラエルに住む日本人は1千人程度とさほど多くない。私の赴任前後から、イスラエルのインフラ事業に中国企業が進出してきていたためか、アジア人とみると「你好」とあいさつされることがほとんどだったが、日本人だと告げると相好を崩し、「日本は素晴らしい国だ」と自身の日本感について熱く語られることが多かった。

イスラエルには一定数の柔道、空手、合気道、書道といった日本の「道」を尊敬し、学ぶ人がいる。また、



死海と遠くにかすんで見えるヨルダン溪谷



プリムに仮装してパブに集まるテルアビブ市民

着物、日本食は根強い人気がある。テルアビブの寿司店の多さには目を見張るものがある。

アニメも人気で年2回、アニメのコスプレイベントもあり、コンテストには手作りのコスチュームでの参加が条件で、こだわりのコスチュームを披露する若者は日本のアニメにあこがれを抱いている。2～3月にはプリムというユダヤ教のお祭りがあり、子どもから大人まで仮装して学校や職場に行く姿を見かけた。

日本との比較

日本との共通点を挙げるとすれば、イスラエルもOECD加盟国でいわゆる先進国であり、ヘブライ語という唯一の言語を持ち、長寿国であるという点で共通しており、一人当たりGDPが4.3万ドルと同程度、ただし、GDPはここ数年日本を超える勢いである。

一方で、日本との違いは、四国ほどの面積の地に人口が増え続けていること。私が赴任した2017年には人口870万人と言われていたのに今や930万人超、出生率は3.0を超えている。

大使館まで徒歩通勤した際に数えてみたが、子どもをベビーカーに乗せて歩く人は男性の方が多かったのに驚いた。安息日には家族が一堂に集まり食事し、家族みんな子育てをするし、パートナーの仕事を尊重し、子育てを分担するという意識が浸透しているように見えた。これは、民族が離散し長い辛い時期を過ごしてきたことから民族、人の命を大事にする、この国ならではの気質ではないかと考えている。例えば、信号のない交差点を人が歩いていたら車は停止が徹底さ

れ、通過しようとする車がいたら車にかけ寄り大声で説教する年配者を何度か見かけた。

また、様々な地域で暮らしてきた歴史があるからこそ、様々な地域の文化を受け入れる寛容さもあり、ジェンダーへの寛容さもある。毎年6月にはテルアビブにおいて参加者25万人規模のLGBTレインボープライドが行われ、街のいたる所に虹の旗が掲げられる。

日本との経済関係とイスラエル国民について

スタートアップ大国として世界的に知られているイスラエルは人口1人当たりのスタートアップ数が世界一と言われ、常に世の中の新たな課題に挑戦するマインドが育まれており、学校では、人と同じことは強いたりせず、自由に発言させることで自然に人と議論する能力が育つようである。

イスラエル国民の特徴を象徴的に表すヘブライ語として、「バラガン」「フツパ」がある。「バラガン」とは混とんとしている様子を表す。例えば、レジに人がどれほど並んでいようと店員との会話を楽しんだり、サービスが不満だと文句をまくしたてる、この状態が「バラガン」というと伝わるだろうか。「フツパ」には、厚かましいという意味もあるが、普通ではできないことを敢然と行うというイスラエル特有のチャレンジ精神という意味も持つ。イスラエルでは少数政党が多く、連立を組まないと政権を取れない状況にあるが、各政策において異なる意見で論戦が繰り返される。また軍でも、上下関係のないフラットな社会で、上司にも個人の主張を明確に意見するという。

イスラエルでは高校卒業後に男女とも兵役が義務づけられているが、軍の経験により命を大切にすることを肌感覚で学び、また一つの目的に向かって共同で仕事をすることを学ぶ。兵役を終えてからアルバイト等で旅行資金を貯めて国外に出かける。もともと旅行好きな国民であり、周辺諸国との関係も深いため、未知の世界を知るためにアジアに旅行する人が多いと聞く。旅から帰ってくる頃には自分の進むべき道を決めて大学進学や起業、就職に至る。日本の大学生とイスラエルの大学生と交流するのを見たが、日本の学生が

体型だけではなく、あまりに幼く見えた。このような「バラガン」と「フツパ」を生み出す家庭や教育・社会環境が年間1千社ものスタートアップ企業を生み出すイスラエルの特徴につながっているのではないかと思う。

イスラエルでは、「イスラエルは0から1を創り出すことが得意であり、日本は1を100にする力を持っている」という表現をよく耳にした。イスラエルが創り出すAI分析技術による信号のアルゴリズムや、顔認証の偽造を防ぐ技術等目を見張る。

他方、インフラでは、イスラエル政府は日本企業の公共事業への参入を求めている。イスラエルに技術シーズを求めて滞在する日本企業は増えているが、インフラ分野に参入している日本企業はほぼない。イスラエルはいまだ車社会であり人口増加に伴い渋滞も激しい。離任直前によりやくテルアビブ・エルサレム間の鉄道の電化が終わろうとしていたが、10年以上も工期がずれ込んでいた。今後は鉄道の電化を進めるとともにライトレールや地下鉄整備等が計画されている。イスラエルの道路の信号システムは欧州と同様(右折・左折分離)でロータリーが多く、道路の両側に駐車地が設けられている。また、鉄道には2階建車両を採用しているなど、欧米企業の進出による整備が進んできた。ここに近年中国企業が進出してきたのは興味深い。



テルアビブに建設中の新ホーム



新エルサレム駅ホーム



2020年2月の国際旅行博 (IMTM) の日本ブース

インバウンドにも力を入れており、新型コロナウイルス感染症の拡大前は外国人観光客が着実に延びていた。そして、新型コロナワクチン対策により、一部の国からの観光客受け入れを開始すると報道されている。2020年東京オリンピックに向けて、イスラエルのエル・アル航空が2020年3月に日本への直行便を就航す



日本への直行便をアピールしたエル・アル航空のブース

る準備をしていたが、新型コロナウイルス感染症によって延期を余儀なくされたことは残念である。

毎年2月に行われていた国際旅行博 (IMTM) には世界各地のブースが並ぶが、開催2日間にわたり日本ブースには来訪者があふれていたことはイスラエルでの日本への関心の高さを物語っている。

最後になるが、新型コロナウイルス感染症で物理的距離はますます意味のない時代になっており、日本とイスラエルの経済関係もさらに深化することを願う。コロナへの対応、デジタル化への対応等、新たな課題へのイスラエルのチャレンジングな対応から日本が学ぶべきことがあるのではないかと感じている。